

北琉球奄美湯湾方言の複数を表す形態素と名詞句階層

新永 悠人¹

要旨²

本発表の対象方言は、奄美大島の島内南西部の宇検村湯湾集落で話されている方言（以下、湯湾方言）である。湯湾方言には複数を表す文法的形態素が3つ存在する。即ち、*-kja*、*-taa*、*nkja* の3つである（初めの2つは接辞、最後の1つは接語である）。本発表では、以下の2点を考察する。

- (1) 湯湾方言の複数を表す形態素と名詞句階層との関連
- (2) 湯湾方言の複数を表す形態素の意味的特徴

1点目に関し、上記3形態素のいずれを選ぶかは、先行する名詞の種類によって決まることを示す。この時、その名詞の種類が、言語類型論において名詞句階層と呼ばれるものと対応することを示す。詳しくは、§1で論じる。

2点目に関し、上記3形態素の表す意味が、通言語的に「複数」（特に、*associatives* 「近似複数」³）と呼ばれる意味とは異なる特徴を持つことを述べる。この湯湾方言に観察される用法は、通言語的にはまだ少数の言語にしか観察されていない特別な複数の用法（Corbett 2010: 234-242 の “special uses”）の一つであると考えられる。詳しくは、§2で論じる。

1. 湯湾方言の複数を表す形態素と名詞句階層との関連

¹ にいなが ゆうと（東京外国語大学・日本学術振興会 PD 特別研究員）

² 本発表は以下の助成を受けている。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所言語ダイナミクス科学研究プロジェクト若手共同研究支援プログラム（2008-09年度）、日本学術振興会科学研究費補助金（2010-11年度）「奄美大島湯湾方言の総合的記述研究および音声・映像データの保存・公開」。本発表のデータは、発表者が現地調査によって得たものである。話者は元田サチさん（90歳・女性）と篠崎ミネさん（95歳・女性）の二人である（共に年齢は2013年4月現在のもの）。

³ 「近似複数」の訳語は Jespersen (1992 [1924]: 191) の “plural of approximation” に対して安藤貞雄氏が当てたものである（イエスペルセン 2006: 184）。Jespersen が挙げている例は、冒頭の1例 (“sixties” 「60代」の例) を除いて、全て人称代名詞に関するものであり、それらは Corbett (2000: 101-111) の “associatives” (“associative plurals” または “group plurals” と呼ばれる) に該当するため、本発表では同じ訳語を当てた。

- (6) a. waakjaga warabi sjuininkjoo, ganba
waa-kja=ga warabi sir-tur-i=n=nkja=ja ganba
1-複数=主格 子ども する-進行-連用=与格 1=主題 だから
hukunkjoo tʰin nənba.
huku=nkja=ja tʰi=n nə-an-ba
洋服=近似=主題 一つ=与格 1 ある-否定-理由
「私たちが子供の時なんかは、服なんかは一つもないから。」
- b. naakjaga sji moojuinnja,
naa-kja=ga sir-ti moor-jur-i=n=ja
2.尊敬-複数=主格 する-継起 尊敬-無標-連用=与格 1=主題
simanu jʰudarooga?
sima=nu jʰu=daroo=ga
集落=尊敬 魚=推量=強調
「あなたが (魚屋を) しなさっている時は、集落の魚 (を売っていた) だろうか?」
- c. urakjoo nusinkjanu atattudu,
ura-kja=ja nusi=nkja=nu ar-tar-tu=du
2.非尊敬-複数=主題 再帰=近似=主格 ある-過去-理由=焦点
siccjuro.
sij-tur-oo
知る-継続-推量
「お前たちは自分たちがあったから [i.e. 自分たちは川船を持っていたから]、(川船について) 知っているだろう。」

上記では、いずれの人称代名詞も *-kja* を用いて複数を標示している。

次は、(指示対象が人間である) 指示代名詞と、呼称詞の場合である。呼称詞とは、呼び掛けに使える名詞のことであり、年上の親族名称の多く、そして人名と一部の職業 (例: *sinsjei* 「先生」など) がそれにあたる。

- (7) a. uttaaga |sansankudo| sjun
u-ri-taa=ga sansankudo sir-tur-n
中称-名詞化-複数=主格 三三九度 する-進行-分詞
turonkjanu izituttijaa.

turoo=nkja=nu izir-tur-ti=jaa
 ところ=近似=主格 出る-進行-継起=連帯
 「その人たちが三三九度しているところなんかが出ていたね。」

b. anmataaga wuppoojaa.
anmaa-taa=ga wur-boo=jaa
 お母さん-複数=主格 いる-仮定=連帯
 「お母さんなんかがいればなあ。」(年上の親族名詞)

上記の通り、いずれも -taa を用いて複数を標示している。

最後に、nkja を用いて複数を標示する例を挙げる。

(8) a. kurinkjoo daakai?
ku-ri=nkja=ja daa=kai
 近称-名詞化=近似=主題 どこ=疑問
 「(写真をみながら) これなんかはどこかい？」

b. kan sji jankjanu dikiijukkjaija
 ka-n sir-ti jaa=nkja=nu dikir+jukkaar-i=ja
 近称-副詞化 する-継起 家=近似=主格 できる+始動-連用=主題
 |nan+nengoro|karakai?
 nan+nen-goro=kara=kai
 何+年-頃=奪格=疑問
 「こうして家などが出来始めるのは何年ごろからかい？」

(8a) にあるように、指示代名詞であっても、指示対象が人間でなければ(上記の例では漠然と場所を指している) -taa を選ばずに nkja を選ぶ。無生物の普通名詞も同様である(8b)。最後に、湯湾方言の指示代名詞の体系を表にまとめておく。

表 2 湯湾方言の指示代名詞 (基底形) (-ri は名詞化接辞)

	人間		人間以外	
	単数 (-Ø)	複数 (-taa)	単数	複数 (nkja)
近称	ku-ri-Ø	ku-ri-taa	ku-ri	ku-ri=nkja
中称	u-ri-Ø	u-ri-taa	u-ri	u-ri=nkja
遠称	a-ri-Ø	a-ri-taa	a-ri	a-ri=nkja

2. 湯湾方言の複数を表す形態素の意味的特徴

湯湾方言には、複数を表す形態素を用いた以下のような表現が存在する。

(9) [文脈：カツオ漁が話題に上っている。]

wanna sijan. waakjoo sijandoo.

waa-n=ja sij-an waa-kja=ja sij-an=doo

1-単数=主題 知る-否定 1-複数=主題 知る-否定=断定

「私は知らない。私なんかは知らないよ。」

上記の発話の場には、90歳の話し手と59歳の聞き手の2人だけが居る。この場合の waa-kja (1-複数) は、「私たち」と訳し得るような複数の指示対象を指しているというよりも、むしろ話し手一人を中心とした漠然とした集団を指しているように思われる（話し手一人を主に指しているという印象は、発話の最初に単数形の wa-n を用いていることから得られる）。同様の例は、-taa にも存在する。

(10) [文脈：亡くなった男性と発表者 (= 新永) の関係について話している。]

attaa ziisantugajoo, |itoko|bəi

a-ri-taa ziisan=tu=ga=joo itoko=bəi

遠称-名詞化-複数 爺さん=共格=主格=確認 1 いとこ=ぐらい

najuncji.

nar-jur-n=ccji

なる-無標-連体=引用

「(その人と) あの人なんかの爺さんとがいとこぐらいになるって。」

上記の「あの人」は発表者 (= 新永) を指している。上記の発話の場には、90歳の話し手と96歳の聞き手、および88歳の聞き手だけが居る。これらの人々は、発表者の家族に会ったことはなく、その存在は伝聞でしか知らない。故に、上記の a-ri-taa を少なくとも日本語標準語の「あの人たち」と訳すことは困難である。

上記2例の興味深い点は、複数の対象を指示することのできる形式が、実質的には単数の対象を指示しているように思われる点である。複数を表示するとされる形式が、純粋な複数（名詞語幹の指示する対象が複数存在する場合）を示さない例として、近似複数と呼ばれるものがある。しかし、上記の例は近似複数とも異なる点があるように思われる。それは主に2点存在する。一つ目として、一

一般的に近似複数と呼ばれるものは、指示対象となる集団自体は話し手・聞き手において同定可能な (specific/definite) ものであるが、上記の湯湾方言の例はそうではない。例えば近似複数の例として、Corbett (2000: 108) には、Central Alaskan Yup'ik 語の近似複数の、“cunankut (Chuna.ASSOC.PL)” という例が挙げられており、その英訳は “Chuna and his family/friends” となっている。それ以外の例もやはり、近似複数が指示している集団自体は、話し手・聞き手において同定可能な (specific/definite) ものであると解釈され得る。⁶ それに対し、(9)、(10) の例はいずれも、複数標識で示された集団が話し手と聞き手において同定可能な (specific/definite) 対象ではない。二つ目として、Corbett (2000) に挙げられた近似複数の例は、いずれも名詞句階層の上位階層の名詞においてのみ発見されている。しかし、湯湾方言の複数を表す形式は、名詞句階層の最下部の名詞 (無生物名詞) にも付くことが可能である。

- (11) waakjaa jankjoo |husumasjoozi|n nənba.
waa-kja-a jaa=nkja=ja husuma+sjoozi=n nə-an-ba
1-複数-連体詞化 家=近似=主題 襖+障子=も ある-否定-理由
「私たちの家なんかは襖障子もないから (汚れを気にせず囲炉裏を使っていたよ)。」

上記の例においても、「(私たちの) 家」は一つしか存在していない。故に、この場合の nkja は、複数の対象を指しているわけではない。また、jaa=nkja 「家なんか」が指す集団は、話し手・聞き手にとって同定可能ではない。

上記のような湯湾方言の複数を表す形態素は、いわゆる近似複数 (associative plurals) とは別の機能を持っていると考えられる。通言語的に見て、それに当たると思われるのは、Corbett (2010: 239-240) に挙げられている “approximative” という複数標識の用法である (おそらく、脚注 4 で挙げた Jespersen の “sixties” 「60代」の例はこれに当たると思われる)。例えば、英語において周辺的な例ではあるが、walkies 「(犬や子供の) 散歩」、drinkies 「酒類」などの言葉がこれに当たると

⁶ 但し、Corbett (2000: 106) には Central Pomo 語の近似複数の標識が不定代名詞に付いて疑問文を作っている例がある。“Bá=toya=wa mída naphó-w? (who=ASSOC=Q there sit.PL-PRFV) ‘Who [all] is living there now?’” (傍線は発表者)。この場合の近似複数の意味は、湯湾方言の意味に非常に近いと思われる。例えば、以下の自然談話の会話を参照 (表層形のみを示す)。ta-t-taa=ga umoo-jur-u? (誰-名詞化-複数=主格 いる.尊敬-無標-非焦点.疑問詞疑問) 「誰なんかが (90 歳以上で元気で) いらっしゃる？」

される。また、マリで話されている Dogon 語の、“isu mbe nie mbe (fish PL oil PL) ‘fish, oil, and similar things’” (傍線は発表者) という例も挙げられている (Corbett 2000: 239)。Corbett (2000: 240) は、“The approximative requires more research. There is evidence only for the use of the plural” と述べており、湯湾方言の複数を表す形態素の例がその研究の進展に貢献し得ると考えられる。

3. まとめ

§1 で挙げたように、複数を表す形式が 2 種類以上存在し、それらが名詞句階層に沿って分布するという現象は他の言語にも存在する (例: Eastern Huasteca Nahuatl 語) (Corbett 2000: 77-78)。また、3 人称代名詞 (湯湾方言では指示代名詞) において人間を指す場合にのみ 1, 2 人称代名詞と同じ振る舞いをするという現象も存在する (例: Central Pomo 語) (同書: 62-63)。湯湾方言の例も、同様の視点から捉えることが可能である。その一方で、§2 で挙げた湯湾方言の複数を表す形態素の振る舞いは、まだその詳細な報告の少ない、貴重な例であると考えられる。

参考文献

- Comrie, Bernard. 1989. *Language universals and linguistic typology* (second edition). Chicago: the University of Chicago Press. (初版は 1981 年)
- Corbett, Greville G. 2000. *Number*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jespersen, Otto. 1992. *The philosophy of grammar*. Chicago: the University of Chicago Press. (初版は 1924 年。邦訳: イェスペルセン・オットー (著) . 安藤貞雄 (訳) . 2006 年. 『文法の原理 (上・中・下)』. 東京: 岩波書店)
- Niinaga, Yuto. 2010. Yuwan (Amami Ryukyuan). In Shimoji, Michiori and Pellard Thomas (eds). *An introduction to Ryukyuan languages*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 35- 88.
- Silverstein, Michael. 1976. Hierarchy of features and ergativity. In Dixon, R.M.W. (ed.) *Grammatical categories in Australian languages*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies, 112-171.
- 角田太作. 2009. 『世界の言語と日本語 (改訂版)』. 東京: くろしお出版 (初版は 1991 年)
- Whaley, Lindsay J. 1997. *Introduction to typology: The unity and diversity of language*. California: Sage Publications. (邦訳: リンゼイ J. ウェイリー (著) . 大堀壽夫、古賀裕章、山泉実 (共訳) . 2006 年. 『言語類型論入門』. 東京: 岩波書店)

補足

本発表資料は、2013年5月31日（金）に開かれる第96回日本方言研究会で発表予定の資料と同一のものである。但し、ページ番号、およびp.3の(4)の図の誤植を修正してある。

念のため申し添えると、本研究会（Lancheon Linguistics）および日本方言研究会は共に「研究会」、すなわち萌芽的な研究を参加者皆で成長させるための存在である。従って、複数の場での発表が否定されない（むしろ、推奨される）。この点は、いわゆる「学会」（基本的に、「学会費」なるものが必要とされる）とは性質が異なることを確認しておく。後者は、むしろある程度形が整った上での（完成に近い形での）発表が期待される場である。